

明治・瀬戸焼の名窯・作家

～ 千年以上の歴史をもつ繊細な陶磁器 ～

加藤勘四郎 [生没年不詳、号：菱勘(◇勘)]



愛知県瀬戸市一里塚町にある窯屋で、染付に使用する西洋コバルトを入手したのは勘四郎が最初と言われています。衝立や額などの板状陶器の製作を得意としていました。明治時代に国内外の万博で高く評価され、瀬戸焼の名工としての地位を確立しました。代表作の染付養蚕図衝立は1881年の第2回内国勸業博覧会買上品で、東京国立博物館に収められています。

< 海外万博の主な受賞歴 >

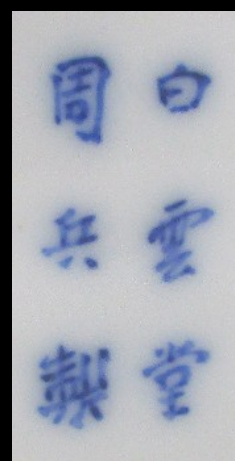
1878年：パリ万博（銅賞）

< 国内の主な受賞歴 >

1877年：第1回内国勸業博覧会（龍紋賞配牌）

加藤周兵衛 [初代：1819-1900年、2代：1848-1903年]

瀬戸・南新谷の陶工で、1852年に分家して「白雲堂」と号しました。1868年に瀬戸窯元取締役、1872年ウィーン万博出品青花磁製造方取締役、愛知県勸業委員などを歴任し、瀬戸の近代陶業の発展に尽くした人物です。1910年の名古屋開府三百年紀年新古美展覧会では、「青華壺形花瓶」で褒状を受賞しています。



2代は初代・周兵衛の長男徳七として生まれ、1894年に結成された「五二会」の理事にも就任し、1897年には陶器貿易会社を設立し、瀬戸の輸出振興、産業発展に貢献しました。周兵衛の作品は森村組の創業者である森村市左衛門、大倉孫兵衛の評価を受け、森村組を窓口にして欧米諸国へ輸出され高い評価を得ました。